第58回「おかねの作文」コンクール

特選　文部科学大臣賞

# カードはまだ、財布の中で。

東京都・ドルトン東京学園中等部　２年　猪谷　三玲

クレジットカード。いつも母の財布の中で、横からちょっとだけ見えていた。薄い板みたいでペラッとしてるのに、なぜか強そうだった。あのカードは、まるで「静かに偉そうにしている誰か」のように見えた。子供には触れられない、結界のようなものだと思った。なのにある日、それが私の手元にやってきた。

この夏、私は学校のプログラムでエストニアという国に短期留学をした。初めての海外で、言葉も通じない場所。「現金じゃ不便じゃない？カード、作るか。」そう父が言って数日後、それは私の家にきた。封を開けて、ひょっこり顔を出したのはツルツルした一枚のカード。ユーロでも使える、便利なヤツだった。「よく考えて使うんだよ。」父のその言葉に、私はちょっとだけ背筋がのびた。カードは無言のまま、私の指先に収まった。４万円ほどチャージしてあるらしく、ちょっとお金持ち気分になった。きっと父がカードを作ってくれたのは、お金の代わりじゃなくて、多分、父なりの「安心」だったのだと思った。

カードをもらって数日、出発の日。エストニアに渡る前、ヘルシンキ空港で小腹が空いたので、小さな売店に入ってみた。見慣れない食べ物や飲み物ばかりで新鮮だった。なんとなく選んだカラフルなお菓子を手に、私はカードを握りしめた。カードをかざし、ピッと音がなるまでの数秒間、心臓の動きが体の中で反響していた。でもレジの人はあっさりしていて、私の初めてのカード決済はあっけなく終わった。最初はドキドキで、「おぉ、これが未来ってやつなんか。」みたいな気分で使い始めた。

でも、ユーロというのは、思ったよりも手強（てごわ）かった。なぜか、数字が全部安く見えてしまう。エストニアのお土産屋さんで、可愛いピンバッジを見つけて手に取った。３.５ユーロ。日本円でいくらかすぐには出てこない。そっとスマホの計算機を開いて、換算して、閉じて。少し迷って、戻す。お金を使うということが、まるで何かのテストのように感じられた。そんな緊張感を覚えると、財布の中のカードが、少しずつ「道具」から「決断」へと変わっていった。

©J-FLEC2025

エストニアの短期留学は終わり、日本に降り立った。羽田空港の照明は眩(まぶ)しく、音が大きくて、日常が戻ってきたようだった。カードを慎重に使ったからか、スーツケースは少し余白があった。エストニアであれだけ悩みながら使ったカードは、財布の中で「旅の続き」として残っている。帰国して、気が緩んでいたのか、「まだ使えるし、ちょっとくらいならいいよね。」私はそう思って、またカードを取り出した。自分の欲しいものを買うとき、タッチ決済をして、ピッと音が鳴る。もう最初のような緊張感はなかった。「やっぱ楽だな〜。」とすら思った。

数日後、父がスマホを見ながら、「カード、勝手に使った？」と静かに言った瞬間、空気は変わり、背筋に冷たい風が走った。声のトーンは怒ってないのに、言葉の一つひとつが鋭く刺さった。使っていいと思っていたはずのお金が、急に他人のものでしかないように感じた。話し合いの末、「自由に使いたいお金もあるだろうから」ということで、残っている３万円で12月までやりくりすることとなった。私の家はお小遣い制度ではなく、都度お金をもらえる制度だったが、１月からは、毎月のお小遣い制度が始まるらしい。

正直不安になった。でも、このミッションを言い渡されてから、私は何にどれだけ使うか、今まで以上に考えるようになった。思い返してみれば、「自分のお金じゃないし、まあいっか。」くらいに考えていた私は、だいぶ甘かったと思う。でも、「そのお金で、あなたがやりくりしてね。」と言われたとたん、それは「自分の責任のお金」に変わった。不思議なことに、そうなると一気に物欲が冷めてしまった。カードを見るたびに、なぜか心の奥がざわつくようになった。欲しかったはずのものも、「今じゃない気がする」と思って棚に戻す。不思議と、買い物を我慢しているというより、「自分が選び直している」ような気がしていた。お金は「誰かのものか」によって、気持ちの持ち方も使い方も大きく変わるんだと知った。

あのカードはまだ財布の中で静かに眠っている。「自分の責任で使うお金」は、思っていたよりもずっと重くて、でも、そういう重さがあるからこそ、使う意味があるのかもしれない。私は今、その「重さ」ごと、お金と向き合っている。

©J-FLEC2025